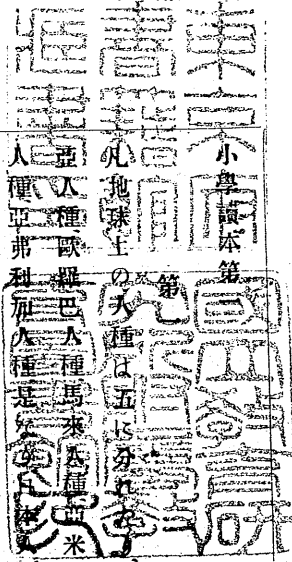


B 26

3065





亞細亞 利加 亞細亞 利加 亞細亞 利加 亞細亞 利加 亞細亞 利加

「細亞人種の中なり」

人に賢きものと愚なるものとあるは

多く學ぶと學ば

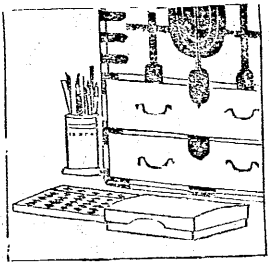
ざるに由りてなり賢きものは世に用ゐられて

愚なるものは人に捨てらるゝこと常の道なれば

幼稚のときより能く學びて賢きものとなり必無

用の人となることなかれ

幼稚のときは先づ日用什器の名を記して其用ゐ



田中義廉 編輯  
那珂通高 校正

方を知るべし○筆は字を寫し又畫を寫す具なり○算盤は物を數ふる用に供す○文庫は書籍を納る、箱なり○筆筒は衣裳などを入れる、器なり

又平生食すべきもの、名を記しこれを調理して、食物となす法を知るべし○食物となすべきものに種々あり

第一は穀物なり○穀物とは稻、麥、豆、粟、黍の類をい



ふ○此等わ皆田畠に作りて其實を取り或わ炊き或わ炙りて食物とするなり

第二は肉類なり○肉類とは魚、鳥、獸肉の類をいふ○此等わ或わ炙り或わ煮て食物とするなり

第三は菓なり○菓は葡萄、梨、梅、桃、柿、橙、蜜柑の類をいふ○此等わ多く生にて食し又鹽に漬けて



食物とするもあり

第四は菜蔬の類なり○此等は畠に植ゑ作るものと野に自生するものとあり○多くは煮て食し又鹽漬とするもあり○凡て菜は葉と根とを食物とす又實を食物とするもあり○此の如く平生用ゐる食物什器をば能く心を留めて忘るゝことなかれ

人の業には種々ありて其學ぶべきところ各異なり然れども先づ書を讀み字を寫し物を數ふることを學ぶを第一の務とすこれを普通の學といふ○この學を爲さざれば何れの業をも習ふこと能はず

故に人は六七歳に至れば皆小學校に入りて普通の學に従ふべし

○小學校は士農工商とも必學ぶべきの業を授くる所なり

學校に到りては何事も一心に師の教に順ひ勉強して學ぶべし

何事を學ぶにも勉強を第一とす勉強せざれば學問に上達すること能はず

一事にても記し得たる所は能く心を用ゐて忘るべからず  
 初より多く記せんとすれば却て忘るゝものなり故に怠なく日毎に一  
 事を記し得て忘れざるときは其記し得たる所の事を自歳と共に積も  
 りて多きに至るべし

他人の一たび讀む所は百たびもこれを讀み他人の十たび習ふ所は千  
 たびもこれを習ふべし○斯の如く勉強して怠りなければ必多く事を  
 記し得らるべきなり○愚なるものも多し事を記し得るときは無用の  
 人たることを免るべし學校にては授業の暇  
 に遊歩の時間あり○此時間には遊歩場に出  
 で、身を動かし心を慰むべし○怠なく勉強  
 したる後に遊歩することは樂となるもの  
 なり

故に遊歩を樂とせんとをもはゞ授業の時間



四

は怠なく勉強すべし

遊歩場に出で、男兒の戯るゝ、技は種々あれども決して危き遊をばな  
 すべからず○輪を廻はし紙鳶を飛ばし球を投ぐる等を宜しとす○朋  
 友相集りて遊ぶときは自檀にして他人の樂  
 を妨ぐべからず女の遊は男兒と異りて走り  
 旋るなどの戯をばなすべからず○朋友を伴  
 なひて遊ぶ時わ心を和らげて何事も親しくすべし



五



我等わ河の中にて遊ばんとす岸の邊は水淺きゆ  
 ゑに水に入りて遊ぶことを得べし○河の正中  
 わ深きゆゑに遊ぶべからず若し深き所に沈む  
 とさわ復出づること能わざるべし○汝の衣裳  
 わ濕ひたれば陸に上りてこれを乾すべし○汝  
 わこの小舟に乗らんとするか○小舟を覆へり

第二

易き故漫に乗るべからずもし過つ時わ水に陥りて其命を失ふことあるべし」

此兒ハ新しき紙鳶を持ってり○彼が糸を持ちて走るを見よ○彼は紙鳶を高く飛ばせんと思ふなり○汝も紙鳶の颯るを欲するか○紙鳶の颯りたるときは能く心を用ゐよ○糸の樹に纏ふことあるべし

彼は新しき帽を持ってり○其舊き帽は破れたるゆゑに新しく買得たるなり○新しき帽をば心を用ゐて或は毀り或は滯すべからず○凡て新しき時より大切に持てば後までも破れ難し故に何物にても脆末にすべからず若心を用ゐずして毀つことあらばその罪を免るべからず」



此猫を見よ恣に臥床の上に坐せりこれよき猫に



はあらず○汝は猫を追ひ退くることを得べしや○否手を出さば必猫に噛まるべし○猫は他所に追遣るべきか又此所に留め置べきか○猫は此室の中に留め置と雖臥床の上に上ることをば許すべからず○汝は此猫の鼠を捕るを見たりや○見たり夜間に鼠を捕ふること屢なり」



汝は小舟に乗れる人を見たりや彼は何如にして其舟を行るや○彼は楫を以て小舟を漕げり」



群兒相集り毬を投げて遊び居れり○彼等の捧を持てるは投げたる毬を受留るを以て樂とするなり若其毬を受留ること能はざる者をば負とするなり○此毬は柔にして堅きものにあらざるゆゑ人に中りても傷くことなし○此は善き遊なれど

も熱き日には早くこれを止めよ、酷しき熱さに  
觸るゝときは、身を害ふを以てなり」

大陽の昇りたるときは我等の起き出つべき時  
の來れるなりと思ふべし○大陽の昇りたる後ま  
でも猶寢所に臥すことなかれ○我等は大陽を  
ば見ることを得れども其出づるを見ることな  
し○汝は大陽の赤さを見たることありや、大陽の赤さときは大抵早  
るものなり

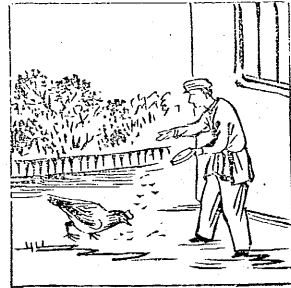


これは林檎の樹なり○汝は此樹の蕾を見たりや  
○此樹には紅き蕾満てり○此蕾をば取るべから  
ず○暫過ぐれば其蕾皆開き美しき花となるのみ  
ならず後にわ實を結びて其味甘き果となればな  
り



彼兒わ牝雞を養へり○雞は穀物を食すること速  
なり○これ嚼むことなくして食するが故なり然  
れども其穀物をば腹に嚼み下ださずし  
唯喉の下なる袋に入れ置き夜間に再吐き出だし  
て始めてこれを腸中に嚼み下だすものなり

第三



彼女は鳥を捕へて籠に入れ置けり○此鳥は馴  
れたりや又時としては噪き暴るゝこともあり  
や○此鳥今は馴れたれども初はよく暴れたり  
○汝は鳥の聲を聞くことを好むか又好まざる  
か○吾は鳥の聲を聞くことを好むのみならず



又其形を見ることを好めり○此鳥は籠より出づることを願へるか○  
若籠より出づるとも再歸り來るべきか又其まゝに飛び去るか○凡て



ども共に遊ぶことをば好まざるなり」彼子は彼小女の爲に親切なり  
 や○然り彼子の親切なることは小女の蹶き倒れ  
 ざる爲に手を執り導くを見て知るべし○彼二  
 人は道に迷ふべきか○否彼子は能く道を知れる  
 ゆゑに二人ども道に迷ふことなし○彼等は林の  
 中を過ることを恐る、か○否恐る、ことなし○  
 小女の母は彼子の恐る、ことなきを知りてこれ



鳥は自由に山林に遊ぶことを好む故  
 に籠より出づることを願ひ一度出づ  
 れば再歸り來ることなし  
 我は惡しき小兒を好まざるゆゑこれ  
 を遣さげんとす○惡しき小兒にても  
 吾はこれを打ち傷くることなし然れ

を任せたるゆゑに親切に導きて家に在ると同  
 じく安全なりしむるなり○若し又家に歸らん  
 とするときはわ自在に歸り得らるべし」

汝は杖を携へたる老人を見たるか○彼老人は  
 路傍の石の上に息ひ其手を杖の上に置けり○  
 彼の顔と其白髪なるに由りて年老たるを知り



又年老たるに由りて體の屈みたるを知れり○何に由りて彼は杖を携  
 ふるや○老人は杖の爲に歩行す杖なくては歩行し難し○彼は年老た  
 れども起つこと、歩行することは得べし然れども急に走ること能は



す時々途上に休みて息を續き杖に頼りて徐  
 に歩行するなり爰に五人あり○汝は此人の  
 年老たるを知れりや○此人は白き髪あれば  
 老人なるべし○此人等は手に杖を持ちたる

老人と同じく年老たり○然れども其身は猶壯健なるゆゑに杖に頼らずして自在に歩行することを得るなり」

彼等の持ちたる笛の名をば何といふぞ○此は喇叭なり○彼等は樂隊の兵卒ゆゑに此笛を吹くことを鍛錬するなり○此笛は兵隊の行列を整ふる合圖に用ゐる又は祝日の音樂に用ゐるものなり○此笛は管長くして先きの開きたるものゆゑに聲



を發すること最大なり」

汝は此人の服紗の中にあるものを書冊なりと思ふか○否これは巻物なり○然らば書冊の次第を數ふるとき何故に卷一巻二と云ふや○この唱は漸に轉れるなり古は只巻物にして書冊ならざるゆゑに卷一巻二と呼びたりしを其後



今の書冊出來りても猶昔の唱に沿がへるなり」

良き老人は我が好に隨ひて問ふ所を教へ又能く小兒を愛するか○然り彼は小兒の善きものを愛すれども惡しき小兒をば決して愛することなし○善き小兒なれば好みて何事をも教ふるなり」



汝は此女子を見たるか○何故に其手を上げてをるや○彼女子は籠に鳥を入れ置きたれども心を用ゐること深からざる故に鳥を養ひ得ず彼籠を持ど即其鳥逃げ去りて直に林の中に飛び入りたるなり○此とき驚きて手を舉ぐとも再捕ふること能はざれば何の用にも立つべからず○彼の鳥を逃がしたるを吾は却て甚喜へり鳥は自由なることを好むものなれ





ばなり

汝は鳥の性を知れりや○鳥は木に在ることを好みて巢を造り兒を養育す○鶺鴒は小鳥にて棘の間に巢を營み鶺鴒は水鳥にて水の邊に巢を造るなり○かし鳥は頭に毛冠あり○すべて諸鳥の林間又は水上に遊ぶは天然の性なればこれを捕へて苦むるは善きことにあらず



第四

此女子が愛すべき人形を持ってこれ等わ遊ぶに宜しき具なり必大切に弄ぶべし○人形を舞はすときは静に動かして毀るべからず母は小兒に向ひて何れの人形を求めんとするやと問ふに小兒は自好む所を指し示せるなり



○此小兒は人形のみを弄ひて倦むるときには何事をなすや○趣を弄ふことを好むなるべし○此店に列ねたる品は皆小兒の好むものなれども此小兒は静なる娘ゆゑに人形を愛して能く心を用ゐるこれを損ひ難ることなし

鳥は終日密樹の枝にをり夜に入れば始めて飛び翔るなり○此鳥は眼力甚強きゆゑに晝間は却て物を見ること能はず暗夜に明なること人の能く日中に物を見るが如し

馬に乗れる人あり○汝は馬に乗ることを好むか○我は馬に乗ることを好み然れども彼の如く疾く走ることを好まづ徐に歩ますることを好むなり○此馬は何故に疾く走るや○馬は彼





に頼りたる、ゆゑに其痛に堪へずして疾く走るなり」

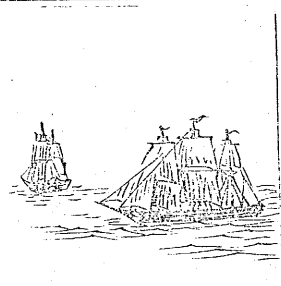
爰に小船と大船あり小船には二本の櫓あり

大船には三本の櫓あり汝は櫓の用を知れりや○櫓は凡て帆を揚ぐる爲に設けたるなり○汝は海を渡るに小船に乗ることを好むか○風吹きて浪の立つ時は我は船に乗りて海を渡ることを好ま



す其覆らんことを畏る、ゆゑなり○これは蒸氣船なりや○否蒸氣船にあらす帆前なり」

爰に暴風の日海上に浮びたる船あり櫓も折れ帆も破れて甚危き状なり○此船は帆前船なるべしもし蒸氣般なれば斯る難に罹ること少



からん○これは軍艦なりや○否商船なり船の腹に炮門なきを見て知るべし」

此小兒は幼年なるゆゑに水の深き所に入ることも能はず○此小兒は何をなさんとするや○これい蓮の小さき葉と大なる葉とを採らんとするなり○もし岸より遠く離れて行くときは水も漸深くなるゆゑに歸ること能わらざるべし」一人の男は帽を被りて左



の手に杖を持ってり○此人は此家の主人にて今他所へ出でて行かんとする状なり○帽を手に持ちたる人は上着を着ずして肘を見はせりこれはこの家の僕にして事をなすに便なるがゆゑなり○僕も今主人の出で行きて後にも終日空しく暮すことを欲せずして其爲すべき事を問ふところな



り入りて草を積上げたり此草の乾きたるを  
枯草と云ふ○枯草は車に載せてこれを馬に引  
かせ直に小屋に運び入る○草は枯れて乾くを  
待ち速に小屋に運び入るべしもし雨に遇ふ時  
は再濡る、ものなればなり○此枯草は牛馬の  
食となすべし○馬は枯草と麥とを食すれども

其最好むものは麥なり

人に耳目口鼻あり○鼻は香を嗅ぎ耳  
は聲を聞き口は食を味ひ又思ふこと  
を言ひ目は物を見るものなり

○鼻と口とは只一つにして目と耳と  
は二つあり○耳と目とは二つありて  
口一つなれば見聞く如くに言語を



第五

多くすべからず○又人には二つの手と二つ  
の足とあれども口は只一つゆゑ話をば少く  
して業をば多くすべし

鶴は大なる鳥にして雛の間、其羽毛茶色なれど  
も生長して後の雪の如く白くなるなり○この鳥  
の長き頸にて長き脛あり○此鳥の卵、大にして  
白きものなり○此類の鳥を涉水鳥といへり淺水  
を涉りて魚蟲を食となせども水上に浮ぶこと  
なく夜の樹上に眠るゆゑなり



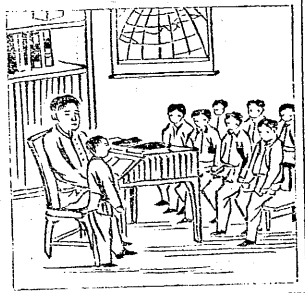
學校に教師入り來れり數多の男兒と小女子とあり  
○此小兒等、皆書を讀み字を習へり○校中に石盤と机と書籍とあり○汝、學校に行くことを好むか

○汝は書を讀み又語を綴ることを能くすや  
○吾の書を讀むことを好めども未だ能く讀む  
ことを得ず」

今日の寒き日なり○雪は一樣に地上に積もれ  
り○小兒の氷の上を滑へることを好む○此遊  
の甚危きものゆゑ能く心を用ゐずあるべか  
らず○もし顛び倒る、ことあらば身を傷ふべし○賢き小兒のかゝる

危き遊を好むことなく只遊歩場に於て遊ぶの  
み」

此兒は手を伸べて卵を取らんとす○巢の中  
は數多の卵あり○これは鶏の卵なり○鶏は巢  
の傍に在りて飛び去らずこれは卵を取らる、  
ことを憂ふるゆゑなり○鶏の卵に小なるもの



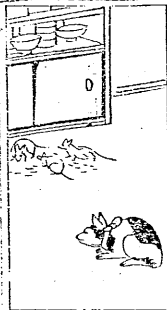
と大なるものとあるは其種類の異なるゆゑなり」  
粟麥と桔梗との花あり○小兒の桔梗の花を採り  
娘の粟麥の花を手にて持てり○粟麥の花は多く紅  
色なり○桔梗の花は紺色なり粟麥の多種なれど  
も概夏に花を開くなり

數多の鼠あり鼠は日中に出づることなし○夜半  
に至りて各出で、遊べり○此出で、遊ぶときは  
梁を行き棚に登り厨に入りて食類を竊み食す○  
然れども猫の聲を聞くとときは驚きて一時に静ま  
り忽穴の中へ逃げ入るなり○故に猫の居る處に



は出でて遊ぶことなし」

爰に馬車ありて數多の小兒と女子とを載せ  
たり○汝は此小兒と女子とを知れりや○こ



れを知れり○これは皆我學校に來る人なり○  
彼の犬は馬と同じく走れり○彼等は汝を見たりや○彼は吾を見るときに必其帽を脱ぐ故に  
我も亦其時には帽を脱がざることなし

この箱の中に響あり○汝は此響を何なりと思ふや○此箱の中にあるは鼠ならずば猫なるべし汝は何なりと思ふや○この響甚小なるゆゑに吾は小き鼠なりと思へり○凡て響の其物に應じて度に過ぎざるものなれば猫にもあらず



大なる鼠にもあらずと思へり  
爰に四人の小兒あり二人は坐して二人は立てり  
○一人の老人ありて」  
此小兒等に神の話を説き聞かさんとす○老人云ふ凡て人は神を敬して我身の幸を願ひむとなら



ば善き道を行ふべし○善き心を持ちて善き道を行ふんことを欲せば小兒の時より學問を勤むべし○學問して壯年に至り毫も過なきとき  
の自神の助を得べし」

今の汝等の如く疾く走りまた遊び戯れしなり○今の足も顛はる、ゆゑに小兒の肩に倚りて立てり○見よ此老人はこれ  
を一年に譬ふれば冬の時候の至れるなり○汝等も冬の時候に至らざる前に學問を勤めて世間の利益を考へ出だすは春の萬物を生長するが如くせずばゆるべからず



爰に梶の大木あり○汝は此木の年を経たる數を



知れるか○此木の年を経たる數を知らんことを欲せば横に切りて木理の輪を數へ見るべし  
○木理の輪は年毎に一つの外は生せざるもの  
なれば輪の數にて其經たる年の數を知らるゝなり○木理の輪は大概  
木の心より増すものなれども希には外面より増すものもあり  
汝等毎朝早く起きて神を拜し先づ今朝まで無難に過ぎたるも神の賜  
なりかく夜明くる毎に日光を給ふによりて父母の恙なき顔を見るこ  
とを得るも皆其思なりと謝すべし○さて其後に吾を導きて幸を與へ  
必過無からしめんことを祈るべし

第六

此人等の小舟に乗り網を以て魚を捕り海濱に  
歸れるなり○網を海上に引きて魚を捕ふると  
きの鱗あるも鱗なきも大なるも小なるも同じ



廿四



く其中に入らざるものなし○汝の此處  
に居る三人の男を見たりや○又彼等の  
捕へたる數多の魚を見すや○海中の魚  
の其種類多くして大なるものと小なる  
ものと長きものと長からぬものとあり

○一人の男は小にして長からざる魚をば取りて海中へ投げ入れたり  
○一人の大なる魚を籠に入るゝ所なり○入れたる魚の此籠に滿ちた  
るときは我が家に持ち歸るなり」

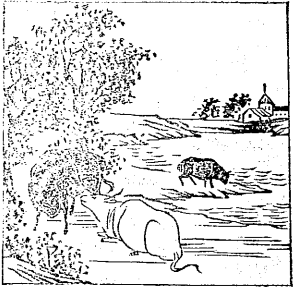
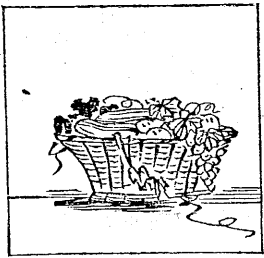
此地を何如なる處と思ふぞ○花園なり○此處  
に數多の美しき花あり○左の手に鉞を持ち右  
の手に帽を持ちたる小兒あり小兒の後に杖を  
持ちたる娘あり○汝の此園を此小兒と娘との  
爲に設けたる所なりと思ふか○又この小兒等



を喜びて遊ぶと思ふか○一人の娘は瓜を入れたる籠を持ちてり○汝は  
 花園に遊ぶとき漫に花を折り又果を取るべからず  
 爰に果を摘み入れたる籠あり○この果は葡萄と  
 梨子なり○籠の外に掛りたるは葡萄の蔓なり○  
 其影は籠の左に在り然れば太陽は何れの方にあ  
 りといふことを知れりや○太陽は籠の右にある  
 べし」



此畫は日の出の景色なり  
 ○今日の晴れたる天氣ゆゑに啼く鳥は木より  
 木に飛び遷る○草は青々として葉に露を帯た  
 り○數多の農夫は野に出で、或は鳥を耕し或  
 は草を刈り○農夫は晴れたる日に必要に  
 出でて働くものと知るべしもし晴天に働かざ



れは霖雨に遇ふとき耕すことを得ずして穀菜を得ることなし」  
 今の日中になりたり○太陽の照らす處は甚熱  
 し然れども樹の蔭へ較涼しきゆゑに臥したる  
 牛と立ちたる牛あり○又一匹の牛は熱さを消  
 せんが爲に河に行きて水を飲まんとす○河の  
 上に橋あり○人は日中になりたるゆゑ皆晝飯  
 を食する爲に家に歸れり」

日暮になりたり○人の野より歸り來り牛は庭に  
 あり○一人の女の庭に出でて牛の乳を搾り桶に  
 満たしめてこれを牛酪に製せんとす○此時男子  
 は晝間変りたる草を積み又干し置ける穀を収め  
 んが爲に極めて忙し今日もし蕎麦を果さゝるとき  
 は明日の業に妨あるがゆゑなり」



神の常に我を守るゆゑに吾は獨にて暗夜に歩行するをも恐る、ことなし○又眠りたるときにも神の守りあるゆゑに暗き所も恐る、ことなし○神の暗き所も明に見るものゆゑ人の知らざる所と思ひて假にも悪しきことをなせば忽ち罰を蒙るなり○人の知らざることをも神は能く知るゆゑに善きものには幸を與へ惡しきものには禍を與ふるなり」

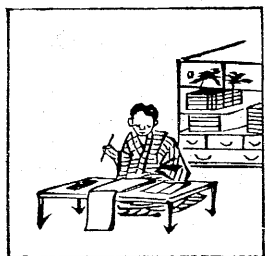


第七 汝の物を數へ得るか○父もし汝に十一の林檎を與へて母もまた五の林檎を與へたるときは幾箇の林檎を得たりと思ふや○十六の林檎なり○然り汝等の物を數ふることを學ぶべし○大なる數と小き數とを知るべし○汝の石盤又紙に數字を書得るか○もし數字



を書き得ずの務めてこれを書くことを學ぶべし  
○物の數を知らざるの愚人なり」  
盆の上に十一の梨ありこの中母の三持ち去れり然らば残りたる梨子の幾箇となれりや○残りたるの八つなり」  
汝等の文字を書き得るか○文字を書き得ざるときに書狀を人に贈ること能はず○このゆゑに汝等の文字を書くことを學ぶべし」

汝等の文字を読み得るか○文字を読むことを知らざれば人より贈りたる書狀をも讀むこと能はず○又書籍を讀み得ざるときに事を知ること能はず○事を知らざる人の縦ひ才ありと雖用には適せざるなり○ゆゑに文字を讀むことを知らざ





る者を同じく愚人といふなり○されば汝等  
務めて文字を讀むことを學ぶべし」

馬の實用に適すべき畜類なり陸地に於て荷物  
を運ぶに馬無くては不便なり○馬の畜類の大



なるものにて顔長く鬣  
あり○背の上に荷を負  
ひて遠きに輸るもあり人を載せて速に走るも  
あり又車を引くもある  
なり」

牛も馬と同じく實用に  
便なる畜類にして能く車を引き又の荷を負ひ  
て遠きに輸るものなり○されども牛の人を乗  
せて走ること能はず○牛の肉の食物となりて



能く滋養をなし又牝牛よりの乳汁を搾り取る  
ことを得るなり」

汝の着たる衣服の何といふ織物なりや○上衣  
の糸織にして羽織の黒羅紗なり○汝の絹と木  
綿と羅紗の中に何れか尤暖なるものと思ふや  
○羅紗の毛織なれり第一に暖なり其次を木綿



とす絹は又其次なり「爰に白き單衣と紺色の單衣あり○汝の何れを暖  
なりと思ふや○白き色の太陽の熱を引くこと  
少きゆゑに夏の涼しと雖冬の寒し○紺色の太  
陽の熱通ひ易きゆゑに冬の暖なりと雖夏の暑  
し○人々夏の多く白衣を着冬の多く紺色の衣  
裳を着るのこの理によりてなり」

爰に二枚の圖あり皆人の働く狀を畫けり○初





の圖ハ田に下たりて秧を植るところなり○この人の肘も脛も露はせりこれ働くに便なるがゆゑなり」

るべし○此人々の衣ハ汗に濡ひて乾くときなし○農夫は此の如く働かざれば穀物を得ることなし○汝等穀物を食する毎に農夫の苦勞を想ひ粒々皆辛苦より出でたるを知りて其業を怠るべからず」

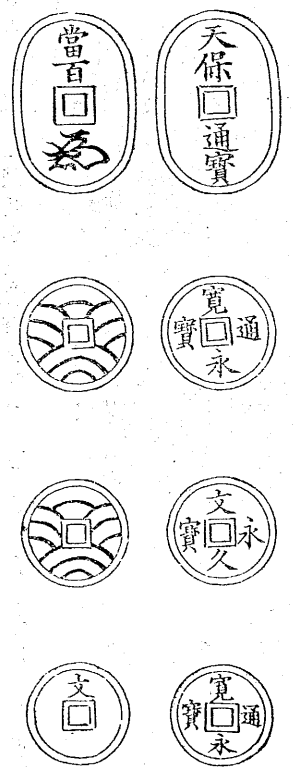


多の女皆朝早く起き夜中までも眠らずして髪も結はず日々息ふ間なく働けり○又二人の男あり桑を採る所なり○此男は野に出で、耕すハと



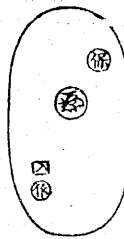
同じく肘も脛も露はに力を盡して働けり○此の如く數多の男女の苦勞して製するに非ざれば糸も生せず絹も得ること能はず○汝等暖なる衣を着たるときにハ必蠶を養ひ絲を取る人々の苦勞を怠るべからず」

爰に種々の貨幣あり



同しく肘も脛も露はに力を盡して働けり○此の如く數多の男女の苦勞して製するに非ざれば糸も生せず絹も得ること能はず○汝等暖なる衣を着たるときにハ必蠶を養ひ絲を取る人々の苦勞を怠るべからず」

右四品の貨幣を錢といふ幕府政を執れるときより今日までも通用するものはなり



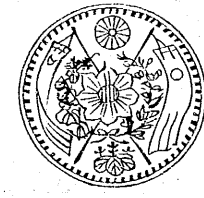
此五品の貨幣を金といふ幕府政を執れるとき通用せしものなり



右五品の貨幣を銀貨幣と云ふ



右五品の貨幣を金貨幣と云ふ





右三品を銅貨幣と云ふ

此三種の貨幣は朝廷の發行にて當今の通用なり

小銅錢一箇を一厘といひ十厘を一錢といひ百錢を一圓といふ故に十  
二錢半は金貳朱に當たり二十五錢は一分に當たり五十錢の二分に當  
たるなり

小學讀本第一終

文部省御藏版書類

活版摺小本  
陸續發賣仕候間  
御購求ヲ乞フ

明治十一年二月十八日 翻刻御届  
同 年三月出版

定價金六錢

翻刻出版人

大阪府平民

柳原喜兵衛

第一大區七小區  
北久太良町四丁目十四番地

賣 捌 所

備前岡山中ノ町

渡邊源米

森州廣島堀川町

荒木豐二郎

免前福岡簗子町

古野支店

印刷 大坂安土町四丁目 柳原活版所